

今週のメニュー

■トピックス

◇Vinyl Sustainability Forum 2017（塩ビ持続性フォーラム 2017）

塩ビ工業・環境協会 専務理事 関 成孝

■随想

◇2002年 レバノン旅行記（2）－2002年のレバノン－

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

■編集後記

■トピックス

◇Vinyl Sustainability Forum 2017（塩ビ持続性フォーラム 2017）

塩ビ工業・環境協会 専務理事 関 成孝

欧州の塩ビ産業が取り組んでいるリサイクルの推進母体である VinylPlus が主催し、欧州政府当局、UNIDO、環境団体、環境コンサルタント、世界の塩ビ業界団体、塩ビ関連企業を招き開催するフォーラムで、今回、5月10～11日に開催された会合には160名の参加者が集まりました。



会場の様子

世界各国の塩ビの市況については、先日、[ブライトン会議の紹介](#)のなかでも触れましたが、全般にポジティブであり途上国では大きく伸びています。アセチレン・カーバライド法が8割を超える中国からは、水俣条約での約束を履行すべく触媒として使用する水銀の削減を進めているとのこと、水銀を全く使用しないプロセスの実用化にこぎつけたとの報告がありました。製造事業者の統廃合を進め効率改善と環境対策を進めているとのことでした。



日本からのプレゼンの様子

UNIDO の EU 代表 Yvetot 氏は、循環型社会を構築する上で、UNIDO の Green Industry Platform の一員である VinylPlus を重要なパートナーとして位置づけ、塩ビ製品の環境性能と持続性への貢献の環境性能、そして、塩ビ関連業者の自主的な取り組みを高く評価しました。人口が大きく増加し消費が大きく拡大することが予想される中で、第4次産業革命やIoT、その他、新技術により経済の効率を急速に高めつつ資源消費を最小化していくことの必要性を唱えました。

スロベニアの環境省次官 Bosmans 氏は、前 EU 議長国として特に包装容器対策における進展を強調し、循環型社会の形成の緊急性を訴えました。また、EU 環境総局局長の Wendenburg 氏も、世界のプラスチックの生産が2014年には約3億トンだったのが、2050年には約12億トンに増加すると予想されていると指摘し、海洋汚染の防止の観点でも循環を前提としたプラスチックの利用と産業の在り方を模索すべきと説きました。

キーノート演説者として、ローマクラブ副議長の Weizsäcker 博士は、地球のすべての人類が米国と同じような生活を享受しようとすれば地球が5個も必要となることを指摘し、エネルギーや資源利用の効率を5倍以上にする（Factor 5）対策の緊急性を訴えました。効率改善に伴う低価格化がリバウンドを生じるのを防ぐ観点で、価格を上げることが必要ですが、作る側（産業）、使う側（消費者）がともにハッピーとなるような方策を模索すべきであり、例えば、コストアップ部分は貧困者と産業界に補てんするなどして税制上の中立性を追求するようなアプローチが必要という指摘をしたのは興味深いものでした。

高名な講演者の方々でしたが、理念を大切にしつつ現実的で実効的な解決策を模索しようとする姿勢は、産業界との協働により新たな経済・社会を切り拓こうとするものであり、勇気づけられるものであるとともに、地球レベルでの環境問題への対応が喫緊の課題と強く認識されていることを感じるものでした。そして、塩ビ製品は循環型社会の模範を示せる潜在性の高い製品分野であることはよく認識されていると感じました。世界の仲間たちと協力を深めて期待に応えていきたいと思っています。



プレゼンを行った GVC メンバー

■ 随想

◇2002 年 レバノン旅行記（2）－2002 年のレバノン－

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

ここからは 2002 年の話です。

2001 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロ事件のちょうど 1 年後、2002 年 9 月 11 日のシカゴからフランクフルトへの飛行機。ガラガラだと思っていたのに、満席。航空会社も予想外だったようで、オーバーブッキングで乗れない人も出る始末。フランクフルトからレバノンの首都ベイルートへの飛行機も満席で、当初予定の 120 名ほどの定員の飛行機が、機材変更で 280 名ほどの定員の飛行機に変更になったほどです。皆さん、意外と気にならないのですね。何も起こらず何よりでした。

日本人にはあまりなじみのないレバノン、その昔はフェニキアと呼ばれていました。歴史の授業で聞いた地名ではありませんか？

皆さんはレバノン発祥のものを、毎日使っています。さて、それは何でしょう？

アルファベットです。

レバノンは中近東の国なので、現在の主言語はアラビア語ですが、アルファベット発祥の地でもあります。

レバノンに“ビブロス”という街があります。うん？ 何だか聞いたような地名だなあ。バイブル（聖書）に似ているような… 或いはパピルス（葦で作られた紙）かなと思った方もおられるかもしれません。

両方とも正解です。

フェニキアで聖書を書くために作られた文字がアルファベット。
アルファベットを書くために作られた紙がパピルスです。

何れも“ビブロス”が発祥であったことが確認されています。

聖書といえば、ノアの箱舟。この、ノアの箱舟はレバノン杉で作られたとされています。

レバノン杉は非常に上質な杉で、フェニキア人が貿易商として世界に出られたのも、このレバノン杉で作られた船があったからだと言われています。

レバノン杉、レバノンの国旗にも使われています。ただ、レバノン杉、車の排気ガスに弱く、今ではめっきり少なくなり、特別な保護地域に細々と茂っているだけになってしまいました。



レバノン 国旗

私が始めてレバノンに来たのは内戦終結直後の1990年。
首都ベイルートにある国際空港に着いた時、「あれ？ どこか中東の難民キャンプにある空港に緊急着陸したのかな？」と思ってしまいました。
滑走路は穴だらけ。ターミナルビルは2/3が崩壊。照明はほとんどなく、入国審査では懐中電灯で照らして書類を見る。
という状態でした。

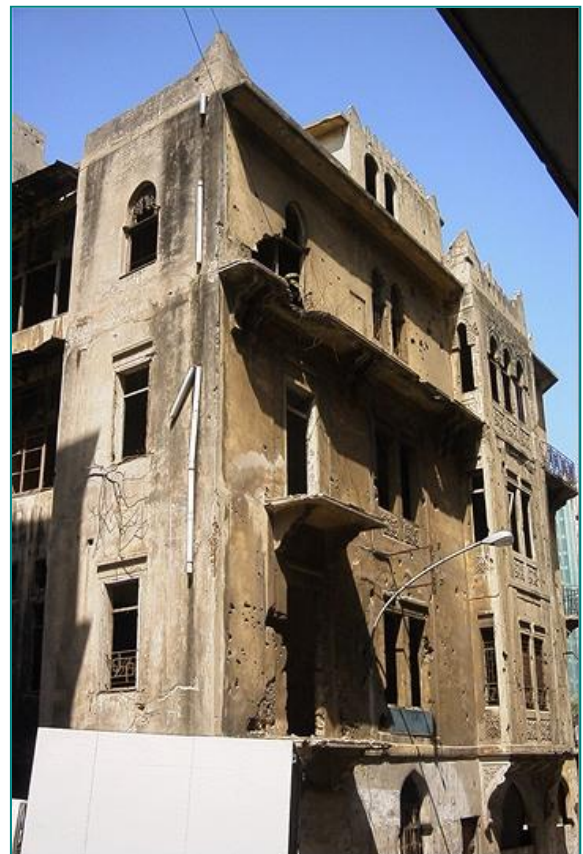
空港前に止まっていたタクシーも、「走るんだろうか」状態。
市内までの道もロケット砲や空爆のためボコボコ。歯をしっかりと食いしばっていないと舌を噛みそう。車内で何度天井に頭をぶつけたことか。

電気の供給も不安定で、いきなり全市停電に。全ての照明が、一斉に消えると、本当に真っ暗になるんですね。
夜になるとレバノンの人は必ず懐中電灯を持って歩き、ほとんどのお店には自家発電機が備えられていました。

建物も半分以上が倒壊状態。何とか立っている建物の多くも銃撃戦の跡で穴だらけ。
道もロケット砲が着弾した跡や爆弾テロの跡で直径3~4メートル、深さ2~3メートルの穴だらけでした。

穴といえば、海岸沿いに植えられていた椰子の木。海岸では頻りに銃撃戦が繰り広げられたようで穴だらけ。幹がメッシュ状態で、木の幹越しに地中海が見えたのが印象的でした。

さて、このような状態だったレバノン。
この12年でどう変わったのでしょうか。



内戦で破壊されたままの建物

(つづく)

次回は、(3) 一道路の横断は命懸けです。
⇒ [バックナンバー](#)

■ 編集後記

5月も半ばを過ぎ、すがすがしい季節と言いたいところですが、なかなかそうも行きませんね。数日の間に4月の気温に戻ったり、真夏日を乗り越して猛暑日になってみたり。また、突然の雷雨など…。体調管理や水分補給などに気をつけなければなりませんね。女子はUVケアもお忘れなきよう！（漠）

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <http://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp